

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

パトリック・ピアス評伝：編集者、教育者、 革命家

鈴木，良平

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

105

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1998-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004626>

パトリック・ピアス評伝

——編集者、教育者、革命家——

鈴木良平

1. はじめに——1916年4月の復活祭蜂起——

1916年4月24日の復活祭の月曜日（公休日）の正午すこしすぎにGPO（中央郵便局）を占拠した Irish Volunteers（アイルランド義勇軍）と Irish Citizen Army（アイルランド市民軍）からなる蜂起軍の最高司令官にして、「アイルランド共和国」臨時大統領の Patrick Pearse は、GPO の入口の所で、「アイルランド共和国樹立の宣言」を読みあげた。その宣言にはアイルランドの民族自決による、独立した共和国の樹立がうたわれていた。

「我々はアイルランドの領有権と、アイルランドの運命を拘束されることなく支配すること、それが主権をもつアイルランド国民の廃棄することのできない権利であることを宣言する。その権利は長い間外国人と外国政府によって奪われていたが、その権利は消滅しなかったし、また、アイルランド人を撲滅する以外には、消滅されるものでもない。あらゆる世代においてアイルランド国民は国家の自由と主権を主張してきた。過去 300 年の間に 6 度アイルランド人は武器をもってそれを主張してきた。その基本的な権利の上に立ち、世界を前にして武器をもって再びその権利を主張しつつ、我々はここに主権を有する、独立した国家としてのアイルランド共和国を宣言する。そして、諸国家の中でアイルランド共和国の自由、福祉そして地位の向上の大義のために努めることを、我々の生命と武器をもって立ち上がった我々の仲間たちの生命にかけて、我々は誓う。」

300 年間に 6 度の武装蜂起とは、(1)1641 年のアルスター地方へのプロテスタントの入植反対の反乱、(2)1690-91 年のカトリックのジェームズ 2 世と、プロテスタントのオレンジ公ウィリアムとのボイン川の戦い、(3)1798 年のフランス革命の影響を受けたウルフ・トーンらの United Irishmen の蜂起、

(4)1803年のロバート・エメットの蜂起, (5)1648年の青年アイルランド党の蜂起, (6)1867年のIRB(フィニアズ)の蜂起, をさすと言われている。

しかし, その共和主義的な文章は, 前後を宗教的色彩の強い文章で囲まれていた。「共和国樹立の宣言」は次のような文章で始まっている。

「アイルランドの人々へ。神の名において, そして国家の古い伝統を受け継いでいる過去の世代の人々の名において, アイルランドは我々を通じてアイルランドの子供たちを旗の下に招集し, 自由を求めて戦う。」

そして, 蜂起のために訓練してきたこと, 前述の共和主義思想を述べて, 永続的な国民政府ができるまでは臨時政府が代行することを述べる。最後は民族としての国家が愛国者の犠牲を要請するという形で終わっている。

「我々はアイルランド共和国の大義を神の保護の下に置く。神の祝福を我々の武器の上に賜らんことを。また, その大義に奉仕する者が, 臆病と非人間的行為と強奪によって, その大義に恥を塗らないことを祈る。この最高に重大な時において, アイルランド国家は, 勇気と規律によって, その子供たちを社会全体の幸福のために犠牲にする覚悟によって, みずからが尊厳な運命に値するものであることを示さなければならない。

臨時政府を代表して,	トマス・J・クラーク
ジョン・マクダーモット	トマス・マクドナー
P・H・ピアス	エイモン・ケント
ジェイムズ・コノリー	ジョセフ・プランケット」(A-280-1)

つまり, 復活祭蜂起の宣言は, アイルランドという国家が, 7人の署名者を通して, アイルランドの民衆に呼びかけている文章なのである。神と死せる過去の人々の名において, アイルランドはその子供たちに犠牲を求める聖なる母親であった⁽⁴⁾。

「共和国樹立の宣言」の署名者は, 社会主義者のコノリーまで含めて, 全員がIRB(アイルランド共和主義者同盟)の軍事委員会のメンバーであった。それが英国側によって, 故意か誤解か, 「シン・フェインの蜂起」と呼ばれ, その名が定着したのは皮肉であった。

臨時政府の閣僚名簿は別に用意されていて, 蜂起に参加しなかったマクニールとかシン・フェイン党のグリフィスなどが本人の同意もなしに含まれていた。

イエス・キリストが死んで全人類の罪を贖い救ったように, 蜂起軍の流血の死の贖いによってアイルランドは民族として, 国家として甦ることができる,

とピアスは信じていた。復活祭というイエス・キリストの死（犠牲）と甦り（Rising）の祝日に蜂起（Rising）の日を設定したこと自体が、すでに宗教的な色彩をおびていた。

また、Wolfe Tone—Robert Emmet—Irish Republican Brotherhood（IRB）の武力闘争の伝統を受け継ぐこと、それがアイルランドの共和主義者の伝統であった。

圧迫・抑圧されている者には、自由を求めて抵抗する権利がある。それ故に武力は必ずしも破壊的な罪悪的なものではなくて、状況次第では罪を贖うものにもなることができた。

革命家たちにとっては武力は、アイルランドが国家として甦り、再生するためには避けることのできないものであった。彼らの行動はイエス・キリストの殉教と贖罪の伝統に訴えることによって、また、古代アイルランドの武士団の勇者たちの伝統に訴えることによって、浄化され、神聖化された。彼らの自己犠牲によって、アイルランドは国家として、民族として救済されることができた⁽²⁾。

また、テリー・イーグルトンの『表象のアイルランド』の難解な言い回しを引用すれば「ゲールのナショナリストの多くは、同一性をごく当然のことと考える。ロマン主義の大部分と同じように、この種のナショナリズムは、表出／抑圧という対立にもとづいた主体のモデルを活用する。……血の犠牲という、ボードリック・ピアスが信奉する種類の祭儀にあっては、自我は、儀式的に放棄されることとなっていた。しかし、このような自己犠牲が安定した自己同一性の別の一面であると見ることはむずかしくない。自分の同一性がこれから先、なん度となく再生されるだろうと知りながら、安心して自分の同一性を捨て去ることができるとは、自分がなにものであるかをいかに熟知しているかという証であろう。」⁽³⁾と自己犠牲が自己同一性の別の一面とみなされている。

それでは、なぜアイルランド人の反乱や蜂起がいつも失敗し、英国がそれらを鎮圧できたのか。それは根本的には武力の問題であった。英国は常備軍をもっていた。アイルランドに常備軍を持ちこんだのはクロムウエルであった。彼の軍隊は虐殺や弾圧の象徴であった。英国の常備軍の費用はアイルランドからの収奪金（税金）で賄われていた。それ以来、英国の常備軍は圧政と結びつき、市民の武器の携帯や市民軍は自由の擁護と結びついた。市民が武器を持つ権利は今なおアメリカには強く残っているとと言われるが、武器は紳士の生得権であっ

た。自由にふさわしい人間だけが武器をもつことができた⁴⁾。それはアイルランドでも同じであった。どちらも英国の最初の植民地であっただけに、圧政に反対する同じ伝統が残ったのかもしれない。ところがアイルランドのカトリック教徒は18世紀の「カトリック処罰法」のせいで武器を持つことが許されず、軍隊にも入れなかった。英国の圧政のために常備軍が持てないとなれば、市民の武装による市民軍ないしは義勇軍を持つほかない。それで結成されたのが19世紀後半のIRB (Fenians) であり、その軍事部門のIRA (アイルランド共和国軍) であった。蜂起軍を構成する Irish Volunteers も Irish Citizen Army もその系譜をひくものであった。

復活祭蜂起は一週間たらずで鎮圧され、ピアスら指導者16人は処刑された。それがアイルランド中の雰囲気を変えていった。そして反英独立戦争を経てアイルランドは自治領となり、さらに完全な独立国になって現在に到るのだから、ピアスらIRB (アイルランド共和主義者同盟) の指導者こそ、アイルランドの建国の父ともいうべき人物なのである。とりわけ、復活祭蜂起の「臨時政府大統領」と「アイルランド共和国軍隊の最高司令官」を兼ねたのが、パトリック・ピアスであったから、彼こそ名目上は最高指導者であった。だが、実は彼の父親は英国人であった。(母親はアイルランド人であったが。)なぜ英国人の息子が熱烈なアイルランドの愛国主義者となり、革命家になり、反英独立の蜂起の最高指導者にまでなったのであろうか。以下その過程を追ってみたい。

2. 幼・少年期

Patrick Pearse (1879-1916) の祖父は植字づくりの職人であり、後に額縁づくり屋になった。彼は自由思想家(宗教的な権威やイデオロギーには拘束されない、自由な思想をもつ人)であった。祖母は敬虔なユニタリアン(三位一体説を排し、信仰の自由や宗教的寛容を強調して、理性中心の宗教経験を行為の指標とするプロテスタントの一派)であった。どちらも自由を重んじる人であったが、生活は貧しかった。

パトリックの父 James は1839年に英国のバーミンガムに生まれた。彼は少年期から働き出し、夜間の絵画教室に通って、彫刻家を志すようになった。19世紀中頃はゴシック趣味復興の時代で、特にアイルランドはカトリック解放令のおかげで、カトリック教会を建てることがブームになっていた。それでジェ

イムズは教会の彫像などの石彫り職人としてダブリンにやって来た。彼は人道主義者で自由を愛し、英国人でありながら反英的であった。英国がアイルランドに基本的な自由や民族自立権を与えることを頑固に拒否していることを非難していた。(B-2)そして、パーネルのアイルランドの自治を求める運動に共鳴し、民族国家のみがアイルランド人を支配できると主張していた。

仕事はうまくいって、友人と記念碑などの彫刻会社を設立し、後に一本立ちした。そして、仕事の必要上からカトリックに改宗した。彼は1864年に結婚したが、妻が死ぬと1877年に36歳のジェイムズは、アイルランドのミーズ州の農村出身でダブリンの文房具屋で働く19歳の娘 Margaret Brady と再婚した。彼女の先祖には反英蜂起に参加した共和主義者もいた。マーガレットは二男二女の4人の子供を生んだ。パトリックは1879年に二番目の子供の長男として生まれた。パトリックの左眼は脛が垂れ下がるかして、すこし具合が悪かったらしく、彼を写した写真はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）のように、いつも右を向いた横顔が多い。しかし、カトリックの家庭では長男は特に大事に育てられた。

父親ジェイムズはあまり社交的でなく、余暇は読書などにあてていた。William Morris のような理想を抱いていた。

ダブリンのトリニティ・コリッジの哲学教授が書いた「アイルランドに対する英国の義務」というパンフレット——アイルランド問題の解決は教育の促進によってなされるべきで、自治を求めるパーネル主義者は最低な人間だ、という趣旨——に怒り、その4倍の長文の反論を書いて自費出版したこともあった。また、支持する自由思想家で急進派の英国の政治家と、マルクス主義的な社会民主連合の指導者との対談を自費出版したこともあった。このような自費出版する性癖は息子のパトリックにも受け継がれていると言えよう。

また、ジェイムズは彫刻職人から自分でデザインもする彫刻家に成り上がり、腕も上がって1882年のダブリンの展覧会では一等賞を得た。しかし、子供の養育などはアイルランド人の妻に任せきりであった。妻マーガレットの80歳をすぎた大伯母がよく訪ねてきて、パトリックらの幼い子供たちにアイルランドの昔話や英雄たちの話をした。大伯母はアイルランド語も話せた。反英蜂起をして処刑された IRB (フィニアンズ) のメンバーも知っていて、フィニアンズだけでなく、彼らの先駆者であるウルフ・トーンやロバート・エメット、さらにはナポレオンのことなども話して聞かせた。それでおのずと大伯母によ

て、幼いパトリックの心にアイルランド語に対する愛と、伝説的な英雄たちの行動に対する尊敬心とが植えつけられたのであった。(E-7)

少年時代からパトリックは賢く、弟や姉妹たちにロマンチックな物語や芝居を書いては朗読したり、演じてみせたりした。同時に、英雄崇拜主義者になり、生まれながらの反逆者であった、という説もある。(B-13) 私塾のような小学校に11歳まで3年ほど通った後に、2歳年下のWillieと一緒にChristian Brothers' Schoolへ16歳の時まで通った。その転校はピアス家の社会的地位の上昇を誇示することでもあった。その間もパトリックは相変わらず芝居などを書いては家族の前で朗読したりした。

しかし、その学校での大学入学資格をとるための受験勉強の重圧と、授業の内容も理解できないのに丸暗記を強いられたことが、若いパトリックの心に学校の教育制度に対する不信感を植えつけることになった。また、その当時は生徒に体罰を加えることも常識であった。それでもその学校で1893年からアイルランド語(ゲール語と同じ)を学び、大学受験資格の科目としてアイルランド語を選んでいる。アイルランド語の勉強は新しいアイルランドの民話や詩歌などの世界をパトリックに与えるものであった。

16歳でその学校を卒業したが、正規の大学には進学しなかった。(講義はなく卒業資格だけ認定するRoyal Universityの大学入学試験を受けるには若すぎた。)そして母校クリスチャン・ブラザーズ校でアイルランド語教師の助手みたいなことをした。また、3年前に設立されたダグラス・ハイド会長の「ゲール語連盟」に入会している。そして、友人たちと「新アイルランド文学協会」を設立し、パトリックは会長になった。メンバーは毎週ホテルに集まり、アイルランド語の詩歌や物語などを暗唱したり、話し合ったりした。パトリックは1897年から98年にかけてその会で3回ゲール語の文学についての講義をし、それらをまとめて*Three Lectures on Gaelic Topics*と題して98年春に出版している。その内容は中学校で教わった教科書に依拠したものとされている。(A-18)

「ゲール語の文学はゲール人(古代・中世アイルランド人のこと)の間のみ発達したもので、その靈感の源泉は完全に上着のもので、文体なども外国文学の影響を受けていない。それがゲール語の文学がユニークで、特殊で、心身をさわやかにする理由なのだ。」と言い、ゲール人の気質として、自然に対する愛と英雄崇拜をあげている。また「ゲール人は理想主義者であり、想像力を

楽しむ」とも言っている。だから「ゲール人の言語と昔話と詩歌、民謡などを救え」という主張になるのである。(K-161~236)

「文学協会」といえば、James Joyce も 1900 年の 18 歳の大学生の時にカトリック系の University College の「文学歴史協会」でノルウェイの Ibsen への傾倒を語った「ドラマと人生」を發表しているが、パトリック・ピアスが最後まで視野が狭く、自己主張ばかりで、論理的な文章があまり得意でなかったのは、大学での一流の「文学協会」で揉まれることがなかったからだ、とも言われている。(A-25) ピアスの文章にはジョイスの評論のような微妙で精緻な議論はなかった。ヨーロッパ文学のみならず英国の文学もあまり読んではいなかったようだ。

3. ゲール語連盟 (編集者)

ピアス (以下パトリックでなくピアスと記すことにする) の教え子であった Desmond Ryan の伝記本によれば、ピアスの 37 年間の生涯は三つのことに尽きる。すなわち、Bilingual (英語とゲール語の二言語併用) の新聞編集者となり、ついでバイリンガルな中等学校の教育者となりながら、最後に復活祭蜂起の革命家になったことである。(C-3)

ピアスの少年時代はアイルランドの Home Rule (自治) に燃えていた時代であった。アイルランド国民党総裁の Parnell はピアス 12 歳の時に女性関係で失脚し死亡した。パーネルの死がアイルランドの民衆に与えた失望はまことに大きかった。その後はアイルランドには混乱にみちた空白期がつづいた。ゲール語を話す地域はますます減少し、大部分のアイルランド人が英語の新聞や雑誌を読むようになり、アイルランドの文化や伝説は古くさい、退屈なものと感じられていった。そのような空白期に Yeats, Synge, Lady Gregory などを中心とする「アイルランド文芸復興運動」の花が開いたのである。

「彼らは高度に審美的性格の国民文学の創造を夢見、それによって祖国愛に燃える国民精神を鼓舞することができると信じていた。彼らによってケルト族の伝統的英雄クー・ハランが、名誉を重んじ、死を恐れぬ偉大な人物として描きだされ、新しい民族の誇りとなって復活した。アイルランドを現在の苦境から救い出せるのはクー・ハランのように高貴な魂を持ち、祖国のために死ぬる人間だけであるというメッセージは、美しくも強烈なアッピールとなって人々の心

を揺り動かした。

イエーツらの文芸復興運動を、単なる知的エリートの小さなサークルから一般大衆のレベルに広げたのは、ダグラス・ハイドとオーエン・マクニールが創設したゲール語連盟であった。彼らはまず、まだゲール語（アイルランド語）が日常的に話されている地方ではその保存を図り、次第にゲール語地域を拡大していくことを目標に定めた。いわばアイルランド語の復権である。⁵⁾

Douglas Hyde はプロテスタントであり、プロテスタント系のトリニティ・コリッジの博士号をもち、前年に設立されたアイルランド国民文学協会の会長でもあった。32歳の若さであったが、学者としての名声は高く、上流階級や知識人の間にも有力な友人をもっていた。マクニールは26歳であったがやがて副会長になり、バイリングルの機関紙を編集して「ゲール語連盟」の運動を推進させた。しかし、「連盟」（以下、連盟と略記する）は、労働者階級の劇作家 Sean O'Casey も言うように、白い襟のシャツときちんとした背広を着こんだ中産階級のカトリックの組織であって、ナショナリズムとも縁がなく、政治的には中立を守っていた。(A-20)

設立3年後に前述のように、ピアスは「連盟」に加入し、中央支部の会合に精勤した。それで「連盟」の執行部に選ばれた。「新アイルランド文学協会」も解散し、仲間を「連盟」に加入させた。そして「連盟」の教室でアイルランド語を教えるようになった。98年には卒業だけを認定する王立大学に入学した。学生たちは自習するか、聴講生として他大学で勉強するほかなかった。ピアスは近代語と法学の二つの学位をとりたかったので、3年間二つの夜間大学に通った。

98年の夏にアイルランド語が日常的に使われているアラン島に行ったことがピアスに刺激を与えた。終生彼は西部地方を愛し、後にはコネマラ地方に別荘を建てている。また、秋からカトリック系の University College でアイルランド語を教えるようになった。ピアスより3歳年下のジョイスはそこでピアスからアイルランド語を習ったが、英語や英文学は不要だ、アイルランド語・文学さえあればよい、というピアスの偏狭さに辟易して、教室を去ったと言われている。(A-29)

1900年に全ケルト民族会議がダブリンで開催されることになり、「連盟」のハイド会長の所にも招待状が届いた。それはアイルランド人、スコットランド人、ウェールズ人、マン島人、コーンウォール人、ブルターニュ人の代表者の

祝典であった。しかし、その祝典を主催する全ケルト倶楽部はダブリン城にある英行政府と密接な関係をもつ、プロテスタント系の団体であった。その祝典への出席をめぐって「連盟」は意見が割れた。(A-32)

その頃のアイランドには反英感情が渦巻いていた。1898年にはウルフ・トーンらの United Irishmen の蜂起の百年祭がおこなわれた。ボーア戦争が始まるとヴィクトリア女王のアイランド訪問に反対する運動が活発になっていった。それで「連盟」に加入する人々が急増し、組織は急成長した。「二十世紀初頭に連盟の支部は600を数え、アイランド語は全国1,300校で教えられるようになっていた。アイランド語の書物は一年間で二十数万部も売れるといった状況であった。……当時、独立国の要件と考えられていたのは、明確な独自の文化を持っているかどうか、ということであり、アイランドはまさにそうした独特の文化を持つ民族なのであるから、当然独立を認められるべきだと主張された。」⁽⁶⁾

しかし、ピアスはノン・ポリというより政治オンチであった。1899年にウェルズで開催された「ケルト民族の詩と音楽の集い」には、「連盟」を代表してピアスが派遣されたが、会合の席でピアスが英女王のために乾杯したことが「連盟」内で非難された。それ以降、彼は英国寄りの右派とみなされるようになった。

1900年にはピアスは出版委員会の書記に昇進した。それはアイランド語を習う会員に教科書を提供する仕事であった。しかし、アイランド語といっても標準語があるわけではなく、時代と地域によってかなり異なっていた。南西部の Munster 地方の会員のダブリンでの拠点である Keating 支部は、マンスター地方のアイランド語こそ標準語にすべきだと主張していた。彼らは西部のコナハト地方のアイランド語を重視する「連盟」執行部とはいつも対立していた。そのうえ金のことで揉めた。「連盟」の教科書の方が民間の出版社の本よりも高価だったからだ。出版の責任者であるピアスは、教科書販売の利益で「連盟」を運営しているのだからやむをえないと言った。会費で「連盟」が運営されていると思っていた多くの会員は不審に思った。批判の応酬になったが、結局、組織が大きくなったのだから運営にもプロの職員が必要だ、ということになった。

1900年に石彫りの彫刻家となっていた父親ジェイムズが死んだ。19歳の勉強中の弟ウィリーが父の職業の後を継ぐことになった。6月にはピアスは王立

大学から近代語と法学の二つの学位を得た。しかし、高級弁護士 (Barrister) は肌に合わなかったらしく、弁護士の道は歩まなかった。貧しい石彫り職人の息子が高級弁護士に成り上がることは、ピアス家の夢でもあったのだが。

そこへピアスが「連盟」の有給の書記になるチャンスがやってきた。ピアスは傲慢だと反対する声もあったが、結局そのポストにつけた。ピアスは少年時代から友人が少なく、他人と接する感覚、感受性にとぼしく、やや風変わりなところがあつたらしい。女性にもも関心がなく、結婚に反対していた。バランスのとれた判断があまりできなかつたらしく、問題を一つに絞って、そこだけを追求するとか、理想化するのが得意であった。

例えば、アイルランド語を日常的に話す西部地方のアラン島の問題にしても、ピアスはそこに住む人々の貧しさが、生活のためにアイルランド語を捨てて英語を学ばなければならない事情が、よく理解できなかった。その周辺の大部分の学校が英語だけを生徒に教えていた。それは子供たちが英語を話せて、町で、ダブリンで、果ては英国や米国で、よい職業につけることを願う親たちの願いでもあったのだ。しかし、ピアスはそこで話されるアイルランド語や物語を一方的に称賛し、住民の素朴な文化や慣習を讃えて、その地域を理想化するだけであった。

それでも「連盟」内では順調に出世していった。1902年には教育委員会の委員を兼ねた。1903年には「連盟」のバイリンガルな機関紙の編集者のポストが空席になった。英語と同様にアイルランド語を話せるバイリンガルであることが、そのポストにつく条件であった。ピアスを含めて3人が応募した。ピアスはさっそく過去3年間の出版委員会での実績を頼りに、機関紙の改革・刷新の詳しいプランをつけて執行部の上司に根回しの手紙を書きまくった。そのせいか圧倒的な票差でそのポストを手に入れることができた。

ところがピアスの機関紙の編集はさっそく論争をひきおこした。記事の論調がアイルランド語に無理解な司祭を非難していることが、「連盟」内の司祭と穏健派を怒らせたからである。しかし、ピアスは神はアイルランド人の味方をする、と言ってひるまなかつた。

さらに、紙面をいきなり3分の1ほど拡大して、教育、文芸欄などを充実させようとした。だが、紙面の拡大に見合うような広告がとれなかつた。また、ピアスは前任者よりも休暇を多くとったり、私設事務所をつくって人を雇ったりしたので、経営的に赤字になり、結局は紙面の拡大は取り消された。

ピアスは万事において現実離れした、理想主義者であった。また、時間には傲慢なほどに無頓着で、会合などの遅刻の常習犯であって、すべてが自己中心的であった。アイルランドの文化や芸術にもあまり理解がなく、言語の保存・復活が「連盟」の唯一の最重要事だと主張したので、他の分野の支持者から批判されたりした。

1905年7月にピアスは姉のマーガレットとともに一か月ほどベルギー旅行をした。周知のように、ベルギーは北半分がオランダ語圏で、南半分がフランス語圏であって、ベルギー語というものは存在しない。そのせいか南北両地域のベルギー人は政治的にもぎくしゃくしていた。それでベルギー政府はどの地域の国民にもバイリンガル（オランダ語とフランス語の併用）の教育をおこなっていた。ピアスはそのベルギーで二言語併用の実態を調査したいと思っていた。それでベルギー教育省の協力でピアスは毎日のように公立、私立を問わず、幼稚園、小学校から大学までの教育施設を視察してまわった。そして、アイルランド語を衰退から救うにはバイリンガル（英語とアイルランド語の併用）方式しかない、と確信するようになった。(E-9-11) そのためには現在の教育制度の根本的な変革が必要であった。帰国後にピアスはバイリンガル方式にもとづく教育論を30篇ほども書いた。

アイルランドの子供たちに英語とアイルランド語を両方とも熟達するように教えることは、英語が圧倒的に支配的な地域でもなんら子供たちには不利にならないことを、ピアスは繰り返し説いた。説くだけでは駄目で実践してみても、すべてのアイルランド人に二言語併用教育の有効性を見せつける必要があった。しかし、英国支配の下では、ダブリン城の英行政府がバイリンガルな学校をつくってくれるはずがない。とすれば「連盟」などの民間機構がつくるほかないが、それには莫大な資金を必要とする。だから「連盟」でもためらっていた。ピアスは理想主義者であったが、信念の人でもあった。他人が躊躇すればピアスの決心は一層強まる。ピアスは独力でバイリンガルの教育実験校を設立しようと決心した。一度心に決めたことは必ずなしとげた。その成果が1908年9月のSt. Enda's College, Cullenswoodの開校であった。

思わず筆が進みすぎたので、話を戻さなければならない。1907年に英国政府は自治法案に代わるIrish Council法案を提示してきた。それは従来のHome Rule案を部分的に容認したものであった。その法案を英政府寄りのアイルランド議会党の穏健派すら拒否したのに対して、ピアスはその法案が教育

的にはアイルランドに自治権を与えるという理由で、受諾することを主張した。

しかし、時代の風潮は変わっていて、文化的ナショナリズムはすでに時代遅れになっていた。ピアスは1912年まで英政府提案のアイルランド自治法案を支持していたのだから当然かもしれないけれど、完全な政治オンチであった。

この頃までのピアスには革命思想などまったくなかった。アイルランド語の普及運動で有名になることだけを目指していた。能力と野心があったので、「連盟」の役職で得た人脈を利用して、自己の目的を遂げようとしていた。その目的とは、(1)アイルランド語を完全に習得して、文学的名声を得るような作品をアイルランド語で書くこと、(2)「連盟」で重要なポストにつくこと、(3)新しい教育制度をつくること、であった。(D-35)ピアスはすでに1905年頃からアイルランド語で子供むけの物語を書き、巻末に簡単な辞典をつけて、アイルランド語の教材として「連盟」から出版していた。また、ピアスが編集者の間は「連盟」の機関紙 (*The Sword of Light*) は合憲的な自治運動を奨励していた。

しかし、この頃までにはすでに「連盟」の内部は政治的ナショナリストのシン・フェイン党員や対英武力闘争を説く IRB (アイルランド共和主義者同盟) のメンバーが多数派になっていた。IRB (Fenians) は19世紀中頃にニューヨークとダブリンでほぼ同時に結成された共和主義者の秘密組織で、他の公然組織のシン・フェイン党や「連盟」などに加入して組織の実権をにぎる方針をとっていた。「連盟」内のシン・フェイン党員や IRB のメンバーは、伝統的に反執行部派であった Keating 支部に集まっていた。

Geoffrey Keating は17世紀にアイルランド語で創作した詩人で、散文でも「アイルランド史」などを書いている。ピアスも彼の詩をいくつか英訳しているが、彼の名をとった Keating 支部は1901年に結成され、彼の言葉「アイルランドよ、精神を目覚めさせよ」をモットーとしていた。「連盟」の執行部ら多数派が、コナハト地方のゲール語を重視して「ゲール語を話す国家」をつくることを目指していた(だから英国との結びつきも維持しようとした)のに対して、反主流派の Keating 支部はマンスター地方のゲール語を重んじて、英国から独立した「ゲール人の国家」を樹立することを目指していた。話を先き走って言えば、1916年の復活祭蜂起は「連盟」の Keating 支部に巣くっていた IRB の連中によって引き起こされたものなのだ。Tom Clarke, Sean MacDermott, Thomas MacDonaugh の3人は「共和国樹立宣言」に署名してい

る IRB の軍事委員会のメンバーだし、その他にも Thomas Ashe, Michael Collins など蜂起後のアイルランドを背負って戦った錚々たるメンバーが目白押しなのだ。その顔ぶれを見れば彼らが復活祭蜂起の中心メンバーであることは疑いえない。(D-39) だから「連盟」の執行部派で、反 Keating 派のピアスは IRB に加入しても、最後まで政治オンチの右派として信頼されなかったのである。

1908 年には二つの事件がおきた。ひとつは小・中学校でアイルランド語を教えている教師ちが手当ての値上げを要求したこと。もうひとつはピアスと肌合わない人物 (IRB のメンバー) が解雇されたことであった。ピアスは両方の事件に口を差しはさんだので、反執行部派の Keating 支部の会員から激しく非難された。執行部内でも両事件に関して見解が分かれ、辞任する者が続出して「連盟」の内紛は深まるばかりであった。ピアスの上司で「連盟」の副議長のマクニールも「機関紙の編集長としてのピアスはいつも「連盟」を困難な状態に追い込んだとわたしはこの数年思っている。彼の意図はよいのだが、慎重さを欠いているのだ」(D-34) と批判した。

さらにピアスは成り上がり根性だとか、頭が高いとか、反聖職権主義者だとか、ダブリン城の英行政府に媚びへつらっていると、個人的にも非難された。彼のアイルランド語の会話もおかしいと native speaker に嘲笑された。(A-89) それで嫌気がさしたのか、1908 年に St. Enda's College を設立すると、ピアスは翌 9 年に「連盟」の機関紙の編集長を辞任した。

4. 聖エンダ男子中学校 (教育者)

1908 年 9 月ピアスは 29 歳にして念願のバイリンガル方式の男子中学校を、ダブリン市の南部に設立することができた。父ジェイムズの会社を整理して得た資金を中心にしたが、不足分は銀行から借り入れた。校名は武士としての英雄的な人生を捨てて、遠く隔離されたアラン島に住む献身的な学僧たちを教育することを選んだ修道士にちなんだものであった。(E-221) 設立の意図は、(1)英語とアイルランド語を二語併用できるように、英語を使わずにアイルランド語だけでアイルランド語を教えるという Direct method で教える男子中等学校、(2)カトリック教会の影響力を排除した、校長も教員も聖職者でない学校、(3)自由で、強制されない、体罰のない、インスピレーションにみちた

学校、(4)英国支配から脱却した、独立国アイルランドを当然とみなす学校、(5)学者よりも奉仕 (service) の精神をもった良い人間を養成する学校、をつくることであった。(M-129) アイルランドの小・中学校は事実上カトリック教会の支配下にあつて、聖職者が校長になつたし、教員も修道士や修道女が多かつた。また、バイリンガル方式を採用することは、英国の教育体制を打破することを意味していた。

ピアスは大変な数の教育論の文章を書いているのだが、一番有名なものは1916年に出版された(執筆はもっと以前の) *The Murder Machine* であるが、その中でも書いているように、英国の教育制度こそアイルランド人の品性を貶め、奴隷にさせるもの、アイルランド人の国家を否定するものであつた。それに反して、16世紀までのゲール人の社会にあつては、教育は養父母と養子の間柄に似た、全人格的なものであつた。偉大な詩人や学者は、かつての日本の書生のように、自宅に生徒たちを住みこませて全人格的な教育をおこなつた。王も若者たちを養育する教師でもあつて、全精力の3分の1を若者たちの教育にあてた。(B-128)

そして英雄クーハラこそゲール人に典型的な、王の直接的な教育をうけて育てられた兵士であつたのだ。クーハラン自身が「わたしは多くの教師に抱かれ、乳をのまされて育てられた。アルスターの戦車隊長、詩人、王などが、わたしの養育における役割をそれぞれ果してくれて、武術、詩作、弁論などを教えてくれた。」と語っている。(H-34) クーハランは祖国アルスター地方の防衛のために侵略軍と戦い、瀕死の体を岩に縛りつけ弁慶のように立ったまま死んだ。死神でもある禿鷹が彼の肩に止まり、血をすすりだしたのを見て、敵も味方も彼が死にかけていることを知つたのだ。その瀕死のクーハランの像は、1916年の復活祭蜂起の拠点となつたGPO(中央郵便局)に、蜂起を記念して今でも飾られている。

真の教育には自由とインスピレーションが必要で、学校では英雄精神を涵養すべきだ、とピアスは主張していた。だから聖エンダ校内の Fresco 画のまわりに、「もしわたしの名声と行動が後世に生き残るならば、わたしは一昼夜しか生きなくてもかまわない」というクーハランの言葉がアイルランド語で書かれて飾られていたという。(C-26, 27)

聖エンダ校に生徒は75人集まつた。男子中学生が43人、小学生(女生徒を含む)が32人であつた。そこでは体罰もなく、両親の要望がない限りは、上

級学校の資格試験をうけることもなかった。ピアスの人脈から Yeats, Column などの一流の文学者などが特別講義に来ることもあった。体育や畑仕事、園芸などが重視され、アイルランド語を話す庭師もいた。2年目の1909年の秋には生徒数もふえ、教員もふえ、施設も2倍になっていた。西部のコネマラ地方には、生徒も使える別荘が建てられた。そこでの2年間がピアスにとっては最高に平和で、幸せな年月であった。

しかし、Cullenswood は市内の雑踏にあまりにも近く、また生徒数も130人と増えて手狭になり、教育の場所としてはふさわしいものとは言えなくなっていた。それに女子校をつくってくれという要望もあった。それでピアスは教育環境として理想の場所を探し始めた。聖エンダ校はアイルランドにおける最高の学校でありたかったので、環境も敷地も校舎も施設も一流のものでなければならなかった。(H-48) 弟ウィリーと探しまわってピアスはダブリン南方の郊外5マイルほどの所に50エーカーの大きなThe Hermitage(隠遁所、修道院)と呼ばれる理想的な場所を見つけた。そこが19世紀初頭の革命家 Robert Emmet にゆかりのある場所であることもピアスには気に入った。

今はその敷地や建物全体が聖エンダ公園になっているのだが、英国を嫌ったピアスには皮肉なことに、大きな樹木あり広々とした緑の芝生あり、湖あり小川ありの典型的な英国式庭園なのである。公園の左隅に三階建てのマンションが建ち、その右側が美しい庭園で、裏手に平屋の校舎が建っていて、今は観光客相手の自然博物館と喫茶店になっている。その左奥に地名の由来となっている修道院だか洞穴のような岩の塊の遺跡があり、さらにエメットが恋人サラと隠れて逢ったエメット砦がある。背後には Wicklow の低い山並みが見える。まことに美しい環境であった。

ロバート・エメットはフランス革命の影響をうけた共和主義者で、ウルフ・トーンらの1798年の蜂起失敗後の1803年に100人たらずの仲間と蜂起を企て、ダブリン城を攻撃するがすぐに鎮圧されてしまう。ただちにフランスにでも亡命すれば死なずにすんだのだが、恋人サラに逢いに行きたくて逮捕され、縛り首にあって殺されてしまう。Cullenswood での英雄崇拜の対象がクーランであったように、The Hermitage でのピアスにとっての英雄はエメットであった。(H-54)

当然ながらそこは購入費用も高く、改築費用などを含めれば6000ポンドもした。そんな大金はなく、ピアスはまた募金をつのった。しかし、集まった金

は一年間の借り賃にも及ばず、また銀行から借金してとりあえず一年間そこを借りて、1910年の秋から聖エンダ校を移転させた。旧住所の Cullenswood には女子校 St. Ita を設立した。

銀行からの借金は生徒数の増加で返済できるとピアスは思っていた。しかし、生徒を集めるには学校の名声を高める必要がある。そのためには校舎などの増・改築が必要で、さらに銀行から借金する、という悪循環に落ち込んだ。(A-145) 環境は申し分なかったが、ダブリン市内から遠いのが裏目に出た。60人ほどの通学生が通いきれずにやめた。生徒数が減れば収入もその分だけ減少する。130人いた生徒が1910-11年には70人、翌年は60人、最後の16年の蜂起直前には14歳以上の中学生は28人しかいなかった。

移転前から聖エンダ校の経営は赤字になっていたのだが、そのつど友人たちの援助で危機を乗り越えることができた。しかし、移転後はピアスの負債は資産の10倍以上になっていた。教師たちへの給料も支払えなくなっていた。それで1912年に友人たちが学校の負債を肩代わりする会社をつくり、8000人が一人1ポンドずつ出資する計画をたてた。だが、肝心のピアスに儉約するという意志がなかった。この頃からピアスは政治に関心をもつようになり、一文無しなのに「勝利のトランペット」というアイルランド語の週刊新聞を創刊した。その新聞はアイルランド語で記事を書かねばならないので寄稿者も少なく、記事の大半はピアスが一人で書かなければならなかった。さらに「自由協会」という政治結社までピアスは結成した。

1912年に英国政府は19世紀以来三度目のアイルランド自治法案を英下院に提出した。それをめぐってアイルランド国内は大きく揺れ動き、世論も政治問題に関心をもつようになっていた。アイルランドの完全独立をめざす IRB や シン・フェイン党、そして英国寄りのアイルランド議会党でもオブライアン派は自治法案に反対した。それなのにピアスは依然として自治法案の賛成派であった。3月下旬にダブリンで開かれた賛成派の集会に、ピアスは4人の演説者の一人として出席したほどであった。もっとも、ピアスの思想は、(1)アイルランド人は魂を失ったのだから、英国と対決することを忘れるべきだ、(2)自治は完全な独立への第一歩だから受け入れる価値がある、(3)もし自治が与えられなければ、アイルランド人は民族的な自尊心を回復するために絶望的な戦争をおこすであろう、というものであった。(A-157)

その後の事態の推移はまさにピアスが懸念した上記の(3)のように進行した。

自治法案は1914年に法律となりながら、第1次世界大戦の勃発という口実によって大戦終了までその法律の施行は棚上げされてしまう。その棚上げに英国の施行引き延ばしの底意を感じて、大半のアイルランド人は失望し、IRBを中心とするIrish Volunteersが蜂起に踏み切るのだから。

そして、ピアス自身も転居したThe Hermitageに住むようになってから、次第に1803年の蜂起を決行したロバート・エメットの影響をうけるようになった。さらに、エメットの先輩であり、1798年のUnited Irishmenの蜂起で処刑されたウルフ・トーンの「自伝」をピアスは読んだ。ついで青年アイルランド党のJohn Mitchelの「獄中記」や、Thomas Davis, Fintan Lalorなどの著作を読むようになった。先輩たちの革命家が不利な状況の中でも蜂起を決行したことにピアスは感銘をうけ、次第に武力闘争の必要性を感じるようになっていった。そして、共和主義者たちの会合にも出席するようになった。

いつしかピアスはIRBの関心をひきオグの対象になっていた。突然、1913年6月のウルフ・トーン墓前祭の演説をピアスはIRBから頼まれた。それは共和主義者やナショナリストにとっては最高に名誉ある役割であった。

“Wolfe Tone was ... the greatest of all that have died for Ireland whether in old time or in new. He was the greatest of Irish Nationalists; I believe he was the greatest of Irish men.” (L-53) とピアスは話を始め、以下のように締めくくるのであった。

“We pledge ourselves to follow in the steps of Tone, never to rest either by day or night until his work be accomplished, deeming it the proudest of all privileges to fight for freedom.” (L-63)

大変な名文で驚くばかりだが、ピアスの雄弁は参列者、とりわけIRBの幹部を驚嘆させた。ピアスの筆がたち、弁がたつことが、いつしか役に立ちそうに思えたからである。

1913年からはピアスの文章や演説はすべて英語が用いられるようになった。一般の共和主義者やナショナリストに自分の見解を理解してもらうには、英語の方がよいと悟ったからであろう。アイルランド語を理解できる人は少なかったからである。若い時に書いたアイルランド語の詩や物語も、後には自分で英訳している。

1913年8月からはJames Larkin, James Connollyらの率いる労働組合員とその家族を中心とした「ダブリン・ストライキ」が始まった。ピアスはそれ

まで労働運動のことはなにも知らなかったが、抑圧された労働者の立場に同情し、社会的不正義を正そうとするラーキンらの行動をほめたたえた。ピアスにとって唯一の収穫は社会主義者のコノリーと知り合いになれたことであった。(詳しいことは、96年の「紀要」の拙文「なぜアーサー・グリフィスは蜂起しなかったのか」を参照して欲しい。)

そして、筆がたつことを認められたせいも、1913年6月から翌14年1月まで、ダブリン・ストライキの期間と重なる時期に、ピアスはIRBの機関紙 *The Irish Freedom* に聖エンダ校の所在地を題名にした“From a Hermitage”を毎月連載した。(その機関紙の編集長がHobsonであった。彼は以前はシン・フェイン党に所属していたが、創立者グリフィスとの路線の違いでシン・フェイン党を離れ、IRBに加入した大物の活動家であった。)

連載の文章の中でピアスは大略次のようなことを書いた。

「アイルランドのナショナリストの運動は議論するだけの協会に成り下がってしまった。シンボルは重要で国民は国旗に敬礼しなければならないが、国家のシンボルの中で最も尊重されるべきものは、その言語である。アイルランドは自由な国ではないのだから、アイルランド人の唯一の立派な態度は反逆である。」

後半では青年アイルランド党のJohn Mitchelの役割を語っている。

「ミッチェルは議論ばかりで忙しい我々の現在の運動と同様に、議論で忙しかった民族運動の中に現実をもちこんだ。」それでもピアスはミッチェル以上にウルフ・トーンを人間としても指導者としても高く評価する。そして、アイルランドの貧困を嘆くのである。

「アイルランドの国民の3分の1は食べ物も十分になく、小学生の半分は栄養不良である。バターもミルクも縁がなく、パンと紅茶だけの食事をとる家庭がダブリンで2万もある。冬の寒い日でも暖房がない家庭が数千もある。2万家庭の住民が1部屋の共同住宅に住んでいる。10人以上の家族が1部屋に住んでいる老朽化した共同住宅もある。……しかし、そのアイルランド人の悲惨さの根源は外国(英国)支配にあるのだ」とピアスは言い、「独立国」となった際の夢を語るのである。

“Before God, I believe that the root of the matter lies in foreign domination. A free Ireland would not, and could not, have hunger in her fertile vales and squalor in her cities. Ireland has resources to feed five times her

population: a free Ireland would make those resources available. A free Ireland would drain the bogs, would harness the rivers, would plant the wastes, would nationalise the railways and waterways, would improve agriculture, would protect fisheries, would foster industries, would promote commerce...” (L-180)

そして、「武器をとれ」と言うのである。

“it is YOUR duty to arm. Until you have armed yourself and make yourself skilful in the use of your arms you have no right to a voice in any concern of the Irish Nation...” (L-197)

このピアスの連載記事は社会主義者のコノリーにも高く評価された。現実もピアスが説くように推移していった。1912年11月に北6州のアイルランドのプロテスタントが武力に訴えてもアイルランド自治法案に反対するために、Ulster Volunteersを結成した。それに刺激されて、1913年7月にIRBは南25州でも義勇軍を設立することを決意した。準備の会合が開かれピアスも招かれ、30人からなる暫定委員会のメンバーになった。そして、11月25日に南26州でもIRB、シン・フェイン党、ゲール語連盟、ゲール体育連盟などの活動家を中心に、マクニールを最高指導者としてIrish Volunteersが結成された。その前日の24日にはコノリーを指導者とする労働者階級のIrish Citizen Armyが結成された。

5. 幕 間——文学活動——

本来ならばピアスの文学活動についても詳しく検討しなければならないのだが、紙幅の関係で最低限のことで済ませたい。ごく大ざっぱに分けて、ピアスの文学作品はアイルランド語と英語の両方でおこなわれている。1912年のゲール語連盟の時期まではアイルランド語で、その後13年にIRBに加入する頃からは英語で、文学ならびに政治的な文章が書かれている。アイルランド語の作品にはゲール語連盟の教材として書かれた物語、また、エンダ校の学内誌などに書かれた詩やドラマが多い。若い頃の「ゲール語文学についての三講義」や教材としてアイルランド語で書かれた子供むけの物語については、すでに述べた。子供むけの物語はセンチメンタルで、西部のコナハト地方の生活を理想化したものが多いが、1907年に出版された英訳題名では“Little Jesus and

Other Stories”は評判がよくて「連盟」で一番売れた本だった。(A-96)それはドラマにも書き直されている。

標題の“Little Jesus”は、老人と少年の物語である。数十年も教会に行ったことない老人が、ある日曜日村人がミサに行っている間に今まで見たことのない子供を見かける。その少年は太陽の光のような明るい顔をしていて、聖職者のような白衣を着ているが、大人が来ると逃げだす。老人がその子と話す、その子はいつも旅をしていると言い、父は世界の王だと答えた。老人はその少年の父の家に招かれ、今晚会う約束をする。その嵐の夜に見知らぬ少年が教会に神父を呼びにくる、老人が死にかけているからと。神父は老人の家に駆けつけ、見知らぬ少年が呼びに来たと言って、臨終の儀式などをすませる。Little Jesus! と叫んで老人は死ぬ。という粗筋の話だが、Oscar Wilde の“The Selfish Giant”に似ているという説もある。(A-96)

アイルランド語の短編集は蜂起直前の1916年にも、もう一冊出している。

1914年にはアイルランド語の自作の詩のアンソロジーを出版している。14年以後も学内の雑誌などにはアイルランド語の詩をのせている。英語で書かれた詩はIRBに加入した後の1914年以降のものが多い。特に、蜂起前後の肉親に宛てて書いた詩が目立つ。

戯曲、野外劇などは聖エンダ校の同僚であり、「共和国樹立の宣言」にも署名しているマクドナーの影響で書き出したもので、学内で生徒によって上演されるために書かれたものだから、アイルランド語の作品が多い。しかし、学外のアベイ座などで上演されたものもある。8篇の戯曲とクーハランなどをテーマにした2つの歴史野外劇を書いている。教育に不可欠なインスピレーションを与えるものとしてピアスはドラマを重視していた。

蜂起直前に書かれた“The Singer”は自伝的な作品として評価が高く「best な作品」とも言われている。(C-94)それは聖書に書かれている「放蕩息子の帰還」の話に似ている。母親 Maire, 養女 Sighle, 長男 MacDara (25歳, Singer), 次男 Colm (20歳, ゲリラの隊長) の4人家族の愛国的なドラマで、長男 MacDara がピアスとみなされている。父親は(ピアスの父親は英国人だったせい)か登場しない。The Singer は銀のトランペットの声をだし、歌詞は美しいので人々を泣かせた。彼は民衆を燃え立たせるような愛国的な歌と、神は存在しないという不敬な歌をうたったせいで、追放されていた。放浪中に彼は真の賢人であるためには俗世間の知恵を捨てなければならないと悟り、愚か者

になった。外国（英国）軍隊が侵略してくる今、その「歌手」が帰ってきたのだ。母親は喜ぶが、外国の軍隊に抵抗して戦え、という指令はどこからも来ない。賢い人々はみなしりごみしていた。それで次男の Colm だけが、養女 Sighle に求婚しながら、仲間のゲリラ部隊とともに戦争に行った。民衆は Colm を見殺しにすることを怒った。教師は「歌手」に立て／と言った。母親も息子の手にキスして、立て／と懇願した。それで「歌手」は立ち上がり、弟がリーダーだと言って、長槍をもって後につづく。そこへ弟が戦死したという知らせが入る。すると「歌手」は、自己を犠牲にしたイエス・キリストになぞらえて、次のように言うのだ。

“The fifteen were too many....One man can free a people as one Man redeemed the world. I will take no pike, I will go into the battle with bare hands. I will stand up before the Gall (英国軍隊) as Christ hung naked before men on the tree!” (J-125)

「共和国樹立の宣言」に署名した者の中でピアスら3人は本当の詩人だったが、署名者7人全員が「歌手」だったのかもしれない。

6. IRB (アイルランド共和主義者同盟)——革命家——

1913年11月にピアスは「来るべき革命」という文章を書いて、その冒頭で「ゲール語連盟は勢力を失った部隊だ」と言い切って、文化的ナショナリズムに別れをつげた。さらに「わたしは交通労働者が武装化するのを見たい。アイルランドの市民のすべての団体が武装化するのを見たい。我々は武器を見たり、使用することに慣れなければならない。」と言い、流血よりも隷属状態の方が恐ろしい、と断言するのであった。

“bloodshed is a cleansing and sacrificing thing, and the nation which regard it as the final horror has lost its manhood. There are many things more horrible than bloodshed; and slavery is one of them.” (L-99)

しかし、政治活動に夢中になったせいもあって、彼の経営する聖エンダ校は借金だらけになって廃校になりそうだった。事実、St. Ita 女子校は12年夏に廃校になっていた。友人たちは援助をしつづけていて、すでに限度をこえていた。結局、ピアスは在米アイルランド人の組織に頼らざるを得なくなっていた。在米アイルランド人組織も分裂していたが、Fenians の団体 Clan-na-Gael と

IRB は密接な関係があった。ピアスの名前は在米アイルランド人の間でも知れわたっていた。それで企策の最後の手段としてピアスは13年12月に面識のあるIRBの機関紙の編集長のHobsonを訪ねた。ホブソンは在米組織と連絡をとり、ピアスのために講演旅行を手配してくれた。そして、渡米前にホブソンの仲介でピアスはIRBに加入した。(G-18) それは秘密結社だけに入会の誓言を必要とする。そして、ひとたび組織に加入すれば、それ以降は組織の決定に従って行動するほかなかった。

14年2月にピアスは渡米した。しかし、講演旅行は楽ではなかった。ピアスが聖エンダ校がいかにくれた教育実験校であるかを説いても、聴衆はあまり興味を示さなかった。彼らは祖国の政治情勢に関心があった。それでピアスも政治情勢を加えたりして、アイルランドの反乱の歴史や、文学、民話、民謡から教育問題まで、講演題目を多彩にしなければならなかった。それまでも多数のアイルランド人が渡米しては講演して、いまにも革命がおこりそうなことを言っただけの結果として在米アイルランド人を失望させていたので、そう簡単には有料の講演会に聴衆は集まらなかった。それでも在米共和主義者の組織の協力でコンサートやダンス・パーティーなどを開いて、かなりの資金を集めることができた。結局、5月上旬まで3カ月も滞米してピアスは1000ポンド以上の大金をもって帰国した。(A-197)

ピアスの渡米の成果は、大金のほかに、(アメリカの独立宣言がワシントン初代大統領によって読まれた) Philadelphiaの共和主義者McGarittyと知り合いになれたことであろう。その後もピアスはMcGarittyと公私にわたって親しい書簡を交わしている。もうひとつは死にかけていた老フィニアン(O'Donovan Rossa)と面会できたことである。ピアスはその会見で大変な感銘を受け、ロッサの後に従うことを決意したほどであった。(B-154)

14年6月にアイルランド議会党のRedmond派がIrish Volunteersに雪崩れこんできて、ピアスなどの排除を要求して、主導権をにぎろうとした。その際にホブソンは妥協的な態度をとろうとしたので、IRBの左派のTom Clarkeなどの怒りをかい、ホブソンは役職をすべて辞任した。(A-212) これ以降IRBではクラーク派が多数を占めるようになった。しかし、義勇軍ではレドモンド派が牛耳ることになった。ピアスらは妨害されて発言もできなかった。

14年7月下旬にアイルランド義勇軍を武装化させるために、ドイツから購入した銃900丁、弾薬25000発がダブリン北部のハウス岬に密輸された。(A-216)

アイルランド義勇軍は軍事訓練にカモフラージュして、それを受け取り、IRBはそれをただちに隠置した。一部分はピアスの聖エンダ校にも隠された。義勇軍も一枚岩ではなかったからだ。最大党派のアイルランド議会党のレッドモンドは、自治法案が成立すればアイルランドの首相になれるだけに、対英協調派であった。彼らは密輸された武器を北6州のNationalist（カトリック）に送って、自治法案に武力で反対しようとするUnionist（プロテスタント）に対抗させようとした。しかし、本音は対英武力闘争派のIRBを武装化させたくなかったのだ。

1914年8月に第1次世界大戦が勃発した。それは第二インターナショナルに所属する西欧諸国の社会主義政党の裏切り以外のなにものでもなかった。1907年の第七回大会以来の「帝国主義戦争を民族解放の戦争に転化させよ」という戦争反対の決議は完全に無視されたのだ。戦争の合図が同時に革命の合図であるべきだ、と信じていた社会主義者のコノリーは、世界大戦をアイルランドの独立戦争に転化させようとした⁶⁷⁾。しかし、彼の市民軍だけでは蜂起できないので、コノリーはIRBに接近した。(B-166) IRBは「英国のピンチはアイルランドのチャンス」という伝統的な方針に従って9月に軍事委員会を開いて、英政府の徴兵制強行に反対するためにも、世界大戦の終了前に蜂起することを決めた。最初は1915年9月の蜂起を予定していた。

世界大戦の勃発で、英議会を通過して法律となっていたアイルランドの「自治」が大戦終了まで実施が見送られてしまった。それで14年9月にアイルランド義勇軍は、戦時中は英兵として参戦することによって、大戦終了後の「自治」の円満な実施を期待するレッドモンド派と、参戦反対で英国の徴兵強行には武力をもって反対するオニール派とに、分裂してしまう。レッドモンド派の義勇軍はNational Volunteersと改名して約17万人。さっそく彼らは英兵として世界大戦の戦場に赴いていった。残されたマクニール派の義勇軍はIrish Volunteersの名称を維持したが、わずか1万人ほどになってしまった。(A-221)

しかし、残されたわずか1万人ほどの新アイルランド義勇軍も一枚岩ではなかった。武力の使用をめぐる、三つのセクトが存在した。(1) 穏健派は参戦に反対で、英国のアイルランドでの徴兵制施行に反対する最後の手段としてのみ武力行使をみとめる立場。(2) マクニール、ホブソン派はチャンスを狙って反英蜂起をしようという立場で、その際も義勇軍の綱領に従って民主的に決定しようとする、大戦中の蜂起には反対の立場。(3) IRB派は綱領などには束縛

されず、大戦終了前に反英武装蜂起を執行しようという立場で、ドイツからの武器援助と蜂起のチャンスを待っていた。(A-222)

アイルランド義勇軍の実権はマクニール、ホブソン派が握っていたが、IRB派との確執は最後までつづいた。マクニール派は在米アイルランド人の共和主義者組織を通じて、ドイツに武器の援助を求めることにして、Casementをドイツに送った。

14年10月にダブリンでIrish Volunteersの総会が開かれ、62人のメンバーからなる総評議会がつくられ、ピアスもその評議員に選ばれた。IRBは重要なポストを押さえ、ピアスは報道部長になった。この頃フィラデルフィアのMcGarittyに宛てた手紙に、ダブリンには訓練された義勇軍兵士が2500人ほどいて士気が高い、など書いてピアスは楽観的であった。(M-332)ピアスは義勇軍の訓練などもおこなっていた。しかし、世界大戦が激しくなるにつれて12月頃から英政府の、IRBやシン・フェイン党、義勇軍などの刊行物に対する検閲がおこなわれるようになり、新聞などの押収、発売禁止がつづいた。

1915年5月にIRBの最高委員会は蜂起の準備のために軍事委員会を設置した。最初のメンバーはピアス、プランケット、ケントの3人であったが、彼らはまだ最高委員ではなかった。(A-224)また、アイルランド義勇軍でも15年初頭に軍司令部がつくられ、ピアスは軍事・組織部長になり義勇軍の実権をにぎって、国内の重要ポストにIRBのメンバーを配置した。(A-228)

6月に老フィニアンのO'Donovan Rossaがニューヨークで死んだ。彼の遺体はダブリンに運ばれ、凱旋將軍のように迎えられた。1867年のフィアンズ(IRB)の蜂起の失敗後に、参加者は逮捕され投獄された。英国での獄中の虐待は酷いものであった。7人が死に、4人が自殺、4人が発狂した。そのような酷い獄中でロッサは食事制限や手鎖などの罰をうけながらも生き抜き、英下院に獄中当選して(1981年の獄中当選のボビー・サンズの先輩だ)英牢獄の虐待を訴えた。それで釈放要求運動が世界的に高まり、フィアンズは釈放されたが、アイルランドには戻らないという条件付きであった。それで彼らの多くがアメリカに渡った。ロッサもその一人で、蜂起したフィアンズの最後の生き残りであった⁽⁶⁾。

8月1日に共和主義者、ナショナリストに限らずアイルランド人全体の民族葬のような大葬儀がダブリンでおこなわれることになった。その葬儀の弔辞を読むという名誉ある役割がピアスに与えられた。葬儀の日、ピアスはアイルラ

ンド義勇軍の司令官の軍服を着ていた。兵士たちも軍服姿に銃をもって参列した。民間人は黒色の礼服に山高帽をかぶり、司祭などは白い法服を着ていた。ピアスの弔辞はアイルランドの前書きつきで、英語でおこなわれた。民衆には彼が Irish Volunteers の最高指導者に見えたにちがいない。

“O'Donovan Rossa was splendid in the proud manhood of him, splendid in the heroic grace of him, splendid in the Gaelic strength and clarity and truth of him.”と splendid という単語をくりかえし使って褒めたたえ、最後は、

“Life springs from death; and from the graves of patriot men and women spring living nations.” (L-136) という有名になった表現で締めくくるのであった。その演説によってピアスの政治的名声は一挙に高まった。

9月にはピアスは IRB の最高委員に昇進し、軍事委員会に加わったクラークやマクダーモットなどと蜂起の計画をたてるようになった。最初 15 年 9 月に予定されていた蜂起はドイツからの武器・弾薬の援助が見込まれるようになったので、16 年 4 月に延期された。IRB も勝ち目がない蜂起を企てていたわけではない。アイルランドの英兵と警官は約 1 万 6 千人。アイルランド義勇軍も全国でそのくらいはいるのだから、ドイツからの武器・弾薬がくれば、蜂起は半年ぐらいつだらう。そのうちに世界大戦が終われば、蜂起軍の臨時政府は事実上の「アイルランド共和国」として交戦権をもち、和平交渉の席につくことができるだろう。それで蜂起は防衛中心の GPO (中央郵便局) 占拠という方針になった⁽⁹⁾。

9月には聖エンダ校でアイルランド義勇軍の軍事訓練がおこなわれ、射撃訓練もおこなわれた。また、ピアスは Wexford の義勇軍部隊の視察もおこなっている。

ダブリン城の英行政府は、ロッサの葬儀の背後に IRB が存在していることを知っていたが、弾圧すれば(義勇軍は武装化していたので)流血の戦いになるので、避けていた。しかし、無視することもできず、散発的に義勇軍兵士を逮捕しては投獄していた。(A-238)

また、英行政府は名声の高いピアスの弱点(借金)を狙って攻めてきた。彼の借金返済の督促に法的手段を用いたりして、ピアスの蜂起の意欲をそごうとした。経済的に破産すると政治的にも破滅することをピアスは恐れていた。結局、ピアスはアメリカの友人に頼るほかになく、フィラデルフィアの McGaritty に宛てた手紙で、アメリカ講演旅行に行ければ借金も返済できるのだが、世界

大戦が終わるまでは行けない、と愚痴をこぼしている。(M-344)

15年12月にピアスは *Peace and the Gale* を書いて、悪を滅ぼすための正義の戦争を認めた。クリスマスには *Ghosts* を書いて、Wolfe Tone, Thomas Davis, Fintan Lalor, John Mitchel の4人を中心にアイルランドの共和主義者たちの伝統を強調した。

16年4月の復活祭蜂起は、クリスマスの日には IRB の軍事委員会で決定され、16年1月の最高委員会で承認された。(B-328) (アイルランド義勇軍の最高責任者であり、参謀長であるマクニールは IRB には加入していなかったが、義勇軍も総司令部一旅団一大隊一中隊からなる軍事組織をすでに確立していた。)

16年1月に社会主義者のコノリーが、4月にはマクドナーが IRB の軍事委員会に加わった。全員で7人。その7人が蜂起の際の「共和国樹立の宣言」に署名している。

以下、紙幅がないので、ごく簡単にすませたい。蜂起を目前にした16年はピアスの文筆活動も忙しかった。まず、2月1日に *The Separatist Idea* を書き上げた。それは英国と決して同化・融合することのないアイルランド人の独立心の源泉をウルフ・トーンに求めたものであった。ついで2月13日には *The Spiritual Nation* を書き上げた。それは19世紀中頃の青年アイルランド党の Thomas Davis の思想を研究したものであった。さらに3月31日には *The Sovereign People* を書き上げた。それは Lalor と Mitchel を研究したもので、Lalor の思想によってピアスのそれまでのロマン主義的ナショナリズムが払拭された。わずか一カ月でピアスの思想はここまで進歩、発展したのであった。ピアスはこの三部作が蜂起一週間前の4月17日に発売されることを望んでいた。(M-359) そして、これらの論文の合間にもピアスは前述のような戯曲 *The Singer* なども書いていて、蜂起の準備もしているのだから超人的と言うほかない。

4月3日、軍事部長としてピアスはアイルランド義勇軍の全部隊に、復活祭の3日間に軍事訓練をおこなう命令をだした。(A-264) その命令がなにを意味するかは IRB のメンバーには明白であった。その命令に驚いた義勇軍の参謀長マクニールは5日に司令部の参謀全員を自宅に招集し、ピアスの命令を取消して蜂起を禁止し、今後のすべての命令にはマクニールの副書が必要だと言明した。

しかし、事態はすでにそのような段階をこえていた。武器・弾薬をつんだド

イッ船がすでにアイルランドに向かっていた。IRB の軍事委員会側は、英行政府が義勇軍を弾圧し逮捕する、という英政府の賈の文書をでっちあげ、参謀長のマクニールだけでなく義勇軍の末端にまでその文書を配付して、義勇軍の反英感情を煽りたてた。(A-266) マクニールは参謀長を辞任するとか言ったらしい。とにかく「共和国樹立の宣言」に署名することを拒否した。それで誰かがマクニールに代わって蜂起軍の司令官にならなければならない。司令官と臨時政府大統領は同一人物が兼ねることが望ましい。それで恰幅のよいピアスが、見栄えがするからと「共和国樹立の宣言」を読む役割に選ばれた。(A-276)

しかし、武器をつんだドイツ船が早く着きすぎて、英船に見つかり、同乗していた Casement は逮捕され、武器をつんだドイツ船は自爆して沈んだ。復活祭の日曜新聞に参謀長のマクニールが「義勇軍の今日の演習は中止された」という急告を出した。それで英行政府は蜂起はないと判断した。しかし、IRB の軍事委員会はなにもしない義勇軍は死んだも同然だ、と一日遅れで蜂起を強行することにした。ピアスは「復活祭の月曜日の正午に決行せよ」という命令書を書き、各地に伝令を飛ばした。(A-274)

当日、12 時すこし前にピアスは約 700 人の義勇軍を率いて GPO (中央郵便局) に向かった。コノリー率いる市民軍約 200 人は英行政府のあるダブリン城を攻撃した。

7. おわりに

Dr. B. P. Murphy は、なぜピアスが蜂起したかという、民主主義が否定され、「自治」の実施によりアイルランドが南北二つの国に分割されることをピアスは恐れていたと言う。だからピアスにとっては蜂起は英国の帝国主義的な動機に対する反対と、アイルランドの歴史的・文化的統一への信念であった、とみなされている。(D-60)

ライオン教授は、第 1 次世界大戦の勃発により、徴兵制がアイルランドに施行されそうな状況になったことを、義勇軍の蜂起の根本要因とみている。大戦はアイルランドの経済にむしろ好景気をもたらしたが、戦争はアイルランド人には他人事のように見えた。つまり、英国の戦争なのにアイルランド人が戦争に巻きこまれて死ぬのは耐えられなかった。それに戦争で「自治」の実施が見送られたこともアイルランド人を失望させた。それでアイルランド義勇軍は

しだいに急進的になり、公然とパレードしたり、軍事訓練をするようになった、と言うのである。(F-359-361)

それでは、なぜ蜂起は失敗したのか。共産党系のグリーブズは次のように言う。(1)(レーニンが言っていることだが) 蜂起が時期尚早だったこと、だから少数派の蜂起になったと言う。アイルランドにおける英国の徴兵制の施行まで待てばよかったと言うが、これはナンセンスに近い。蜂起の結果として徴兵制は実施されなかったのだから。(2)武器が入手できなかったこと。(3)義勇軍の優秀なオルグが多数逮捕されてしまったこと。(4)参謀長マクニールの反対と妨害。(N-25-26)

ピアス個人としては、人脈的に言って、蜂起を決行するに際して「ゲール語連盟」のマクニール、ホブソンらの執行部派から、クラークなどの反執行部的なキーティング支部派に乗り換えた(ホブソンを蜂起直前に逮捕・監禁させた)(B-357)ことが、執行部派の反発をかい、最後まで義勇軍がまとまらなかった原因かもしれない。

ピアスは逮捕され、軍法会議にかけられた。その際の陳述書の最後にピアスは次のように書いた。

"You cannot conquer Ireland. You cannot extinguish the Irish passion for freedom. If our deed has not been sufficient to win freedom, then our children will win it by a better deed. P.H. Pearse Kilmainham Prison"
(M-379)

参考文献

Patrick Pearse の生涯などは、主として下記の文献によった。

- (A) Ruth Dudley Edwards, *Patrick Pearse—The Triumph of Failure—*(Faber & Faber, London, 1979)
- (B) Louis N. Le Roux (translated by Desmond Ryan), *Patrick Pearse* (The Talbot Press, Dublin, 1932)
- (C) Desmond Ryan, *The Man Called Pearse* (Mausel and company Ltd., Dublin, 1919)
- (D) Brian P. Murphy, *Patrick Pearse and the Lost Republican Ideal* (James Duffy, Dublin, 1991)
- (E) *The Story of an Educational Adventure* (The National Parks and Monuments Service, Office of Public Works, Dublin, 1986)
- (F) F. S. L. Lyons, *Ireland Since the Famine* (Collins/Fontana, 1973)
- (G) *Pearse from Documents* (The National Library of Ireland, Historical Documents)

- (H) P. H. Pearse, *The Story of A Success* (Mausel and company Ltd., Dublin, 1917)
- (I) Seamas O. Buachalla (ed.), *A Significant Irish Educationalist — The Educational Writings of P. H. Pearse* (The Mercier Press, Dublin, 1980)
- (J) Seamas O. Buachalla (ed.), *The Literary Writings of Patrick Pearse* (The Mercier Press, Dublin, 1979)
- (K) *Collected Works of Padraic H. Pearse* (Songs of the Irish Rebels and Specimens from An Irish Anthology etc.) (The Phoenix Publishing Co Ltd. Dublin)
- (L) *Collected Works of Padraic H. Pearse* (Political Writings and Speeches) (The Phoenix Publishing Co Ltd. Dublin)
- (M) Seamas O. Buachalla (ed.), *The Letters of P. H. Pearse* (Colin Smythe, G. B. 1980)
- (N) C. Desmond Greaves, *1916 as History—the myth of the blood sacrifice—* (The Fulcrum Press, Dublin, 1991)
- なお、本文中の()内の記号 A, B, Cなどは、上記の文献に対応する。例えば、(A-10)は、上記文献(A)の10ページを示す。

注

- (1) Richard Kearney, "Myth and Terror" in *The Crane Bag Book of Irish Studies* (1977-1981) (Blackwater Press, Dublin, 1982) p.275
- (2) Sean Kinsella, *The Cult of Violence and the Revolutionary Tradition in Ireland*. (Studies, Spring, 1994) pp.20-23
- (3) テリー・イーグルトン, 「表象のアイランド」(紀伊国屋書店, 1997) p.420
- (4) Prof. Cullen, Modern History, Trinity College, Dublin の御教示による。
- (5) 波多野祐造「物語アイランドの歴史」(中公新書, 1994) p.204
- (6) 同書, p.208
- (7) 拙稿「なぜジェイムズ・コノリーは蜂起したのか」(法政大学教養部紀要, 1994) p.20
- (8) Michael Kerry, *The Fenians* (The National Museum of Ireland, Dublin, 1994) p.38
- (9) 「なぜジェイムズ・コノリーは蜂起したのか」p.22

どういわけかピアスの新しい文献はまったく出ない。Connolly や Collins や de Valera の本はそこそこに出るというのに。上記の文献でも (B), (C), (G) などは一方的な賛美に満ちていて参考資料にならない。結局、生涯などの参考資料は (A) だけである。それで特に注記がない限りは、本稿の記述は (A) に依拠している。